

「働きながら学ぶ生徒の健康管理と進路実現のために」

兵庫県立洲本高等学校
教諭 上谷 円

1 取組の内容・方法

(1) 兵庫県立青雲高等学校（通信制）における生徒の健康管理のマネジメントと進路実現の模索

平成 18 年度～平成 21 年度まで、保健部長を特に平成 18 年度には保健部長会の定通制部会の幹事を務めさせていただきました。通信制高校では、生徒はスクーリング日のみの登校であり、健康状態を観察することは難しいものがあります。そこで、尿検査を健康管理の第一歩と位置付けて徹底して回収をしました。検尿によってさまざまな生活習慣が知られることを恐れる生徒がいることも想定されるので、検尿でわかることがどこまでかをくりかえし説明し続けました。また、エクセルを利用して健康診断の結果の集計と治療勧告書の配付も始めました。生徒の健康管理に活用するとともに職員の負担軽減もはかりました。

平成 22 年度～平成 24 年度までの年次主任を経て、平成 25 年度～平成 27 年度には進路指導部長を、平成 26 年度には県高校進路指導研究会の神戸地区幹事を務めさせていただきました。年々増加傾向にあった不登校経験や学び直しの生徒の進路をどのように実現していくかが課題でした。就職希望はあるものの、社会経験が乏しく、キャリアプランニングが難しい生徒に対しては、就職に対しての心のハードルを下げることを意識して、ジョブカフェ兵庫やハローワークへの生徒引率し、企業見学、校内説明会を行いました。

進学希望者のために進路指導室の資料も充実させました。毎月生徒に送付する「進路のしおり」は、最新の受験情報を盛り込み、資料の需要具合から生徒の進学希望分野を予測しての紙面を構成していくよう心がけました。また、進学についての説明会を実施し、個別の進学相談にも丁寧に応じました。業者テストは、受験の雰囲気慣れをもらうために校外の会場を紹介しました。

これらの活動と同時に、企業、大学・専門学校には、不登校経験、学び直しの生徒に対する理解を求めました。

(2) 兵庫県立洲本高等学校（定時制）での生徒理解と支援についての活動

平成 28 年度に洲本高校に着任してから、総務部長として、毎日の打合せ時に「生徒の情報交換」を行っています。最近見聞きした生徒の情報「学ぶ」・「働く」・「学校生活」・「地域の一員として」の良いこと、悪いことを含めて、ざっくばらんに話せる雰囲気づくりを心がけています。

「ふるさと貢献事業」も担当させていただき、地域の老人会、社会福祉協議会などと連携して、地域の一員として生徒の活躍できる場を拓げ、地域住民にこれまで以上に定時制高校を応援していただけるようにしています。

また、地歴公民科として学校設定科目「郷土研究」を担当し、「ふるさと淡路島」に対する基本的な知識の充実と郷土愛の育成を図りました。



<「郷土研究」 学校近隣のため池の護岸工事の様子を見学する生徒>

2 取組の成果

(1) 兵庫県立青雲高等学校での取組について

検尿での健康管理の呼びかけの徹底によって、毎年約 1000 人分の検体を集めることができました。結果、若年性糖尿病の罹患者の早期発見・早期治療につなげることができ、若年者の健康を守ることができたことが、もっとも嬉しかったことです。非常勤の養護教員、保健部の先生方、保健体育科の先生方のご協力あってこそこの成果です。また、学校内研修で得た技能をもとにして作成したエクセルの集計表は、現在も改良を続けて使用されていると伺っています。

学卒就職への心のハードルを下げることで、1 度の不採用通知で諦めないよう励まし続けた結果、多数が学卒就職し、それを知った生徒が次に学卒就職を志すというよい循環が生まれました。就職先送りを考える生徒に自分のこれからのキャリアを考えさせることができたことなど、就職担当、就職開拓支援員と機動的にケース会議を持ち、生徒を指導できたことが大きかったと思います。

進学では、国公立大学を含む 4 年制大学や短期大学、専門学校への進学者も順調に増え、生徒にやればできるとの自信をつけることができたのではないかと思います。

生徒への指導と並行して、通信制高校で学ぶ生徒への理解を求める働きかけでは、ハローワークが企業への求人説明会にて通信制高校生への配慮を呼び掛けて下さり、また多くの大学・専門学校が推薦入試での欠席要件から通信制高校を除く旨を明記して、生徒の努力を評価して下さることになりました。

就職・進学を問わず、若年者が社会とつながり続けることに微力ながら寄与できたと思っております。

(2) 兵庫県立洲本高等学校での取組について

「生徒の情報交換」を頻繁におこなうことから情報を共有し、一人一人の生徒を全教員が、「学ぶ」・「働く」・「地域の一員」としてなど、多角的に見ることができるようになり、ここから、生徒の成長を支援する、多面的で多様な指導へとつながり、生徒指導件数の大幅な減少、不登校経験生徒の学習継続率の向上につなげることができたと考えています。

地元の老人会とは、学校周辺清掃や学校行事を通じて交流しています。清掃では、「いつもは清掃できないようなところも清掃できてうれしい」と喜んでもらっています。体育祭は、地元老人会チームと定時制チームとの綱引きを楽しみに、多くの方が参加して下さっています。

学校設定科目「郷土研究」についても、文献を読んだり、巡検を行う中で生徒が「ふるさと淡路島」について島外出身の私に教えるという双方向の授業が展開できるという思わぬ成果があがり、生徒が淡路島に対して深い愛情を持っていることが感じられました。



<海水浴シーズンを前に^{たけのくち}炬口海水浴場の清掃をする>



<洲本高校定時制ののぼりを立てて、学校周辺を地元老人会とともに清掃する>



< 体育祭 生徒優勝学年と地元老人会の綱引きエキシビジョンマッチ >

3 課題及び今後の取組の方向

定時制通信制には生産年齢人口の最も若い層が「働きながら学んで」います。健康管理や進路実現は見落とされてしまう可能性があり、また、勤労高校生については、若年者労働の問題研究からも取り残されている感があります。この勤労高校生の労働と学びについて考えていくことが、これからの課題と考えています。

たとえば、生徒の多くは小規模な事業所でのアルバイトなどの非正規就労が多く、体調の悪化を「勤務多忙による疲労蓄積」と自己判断してしまう場合もあり得ます。その点から学校健診は健康を守る上で重要な位置を占めていると思われま

す。働きながらの「学び」についても授業や教材の見直しを進めます。世界史Aの授業でも「国王のかけもちがブラックやで～」と自らに引きつけて共感する生徒たちです。高校は多くの生徒にとって最後の学校となることから、幅広い教養を身に付けて社会に送り出したいと考えています。生徒たちは、下校時には「お疲れ～」と挨拶をします。教える者と学ぶ者との厳然たる違いはありますが、同じ働く者としての共感がそこにはあります。一人一人の生徒を多面的にとらえ、個々に応じた指導を進めていくために、今後も情報交換を続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、淡路島は、若年者人口の流出という問題があります。その中で、地域を支える若者として、定時制の生徒は期待されています。学校と地域とが一つになって、若年者の進路が実現できるよう協力を仰ぐこと、それが進められるよう洲本高校のチームワークを今以上に高めていくことに微力を尽くしていきたいと思